

雛十句

水谷年恵子

花さかぬ片山陰もひな祭 一茶

草書の賤が伏屋、そこにも女の兒がゐるて、小さいあき箱か何かに赤い布切を掛け、雛壇を造つて鼻のかけたお人形、手垢によごれたはふ子様なき飾つてゐる。桃の蕾は未だ固いが、山陰の雛の宿にも上巳の春が訪れてお人形の顔に千年の壽が輝いてゐる。

雛祭る都外れや桃の月 蕪村

三日月のほのかに匂ふ桃の宵である。雛にかしづく都外れの小家のほこり、眉よりも細い月光が、ほころび初めた桃の唇をめぐつて、五人囃の樂の音よりも妙なる詩を奏でてゐる。

灯ミもせば長し短し雛の影 松宇

金屏をめぐらして崇嚴な氣のたゞよふ處にましますは神神しい内裏様。或は坐して盃を持ち、或は立つて長柄・銚子を捧げるは美しい官女、五人囃は陽氣な衣裳で、唄を歌つて笛吹いて、太鼓たゝいて鼓を打つて、拍子をかしく囃してゐる。左大臣に右大臣、綺羅錦繡に威儀を正して控へ給ふ。数々のお調度・御馳走に五彩の色が流れ、みりくくの雛の姿に珠玉の光が添つて、左近の櫻・右近の橘のかをる御殿の眞晝はまばゆいばかりである。

日が暮れた。

春宵一刻價千金、雛の御殿の艶なるゆふべである。雪洞の灯影に大宮人の花のかんばせ、ほのくく匂つて、あてなる姿のほのかな影―影―長い影、短い影、美しい影―

祖母の雛母の雛までかざりけり 小さん

これはおばあさまのよ、これはお母さまのよ、みんなみんな飾つたのよ、これはあたくしの、ねえお雛さま、うれしいでしょ。

雛壇にゴボミ汐ふく榮螺かな 冬葉

青い海原大波小波

榮螺のおうちは海の底

何處へ来たのか知らない榮螺

誰もたづねてくれない榮螺

誰にいうたのかゴボミいうた

雛の御殿の夜あけがた

鼻紙や誰が泣屑の島ひいな 紅葉山人

鳥も通はぬ八丈島へ、島流しに遭つた英一蝶が、島で三

月上巳の節句を迎へた。花のお江戸の雛祭を八重の潮路の

彼方で追想して、紙で八丈島の風俗人形を作り之を飾つ

て、獨り寂しい祭をしたさいふこまである。

島ひいなの一匂、よく當時の一蝶が心境をうつして哀情

つくる所を知らず、鬼神も涙を落すの感がある。

手のひらに飾つて見るや市の雛 一茶

手のひらに飾られた雛の、夢見るやうな眼、笑みすぼめ
 口もさなき、見えるやうであるが、それよりも之を眺め
 て悦に入る人の姿が彷彿として目に浮んで来る。何ぞ好ま
 しい雛市情景であらう。

雛市は江戸の十軒店か、或は他か。十軒店は昔から有名
 なもので、今に居附の雛師七軒が残つてゐる。

玉翁・玉山・玉船・光月・久月・弄春齋・永徳齋さいふ。

信州下高井郡中野町、之も古來雛市で有名な處である。

「中野名物數ある中で音にひびきし御雛市」

一茶が句の生まれたのはいづこの雛市か、なつかしいこ
 こである。

旅人の桃折つて持つ節句哉 樗良

陰曆三月三日の節句の頃は恰も桃の花が眞盛である。桃

の節句の名ある所以である。桃は仙木で、支那の西王母の

園の桃は三千年に一度花咲き實がなるさいふ。その實を食

べた者は千年の齡を延べると言傳へてゐる。

めでたい桃の一枝を手折つて、今日の節句の旅路を行く
人の、無事を祈るに似た心が思はれておもしろい。

此の節句に桃の花を酒に浮べて飲む風習がある。百病が
癒えて、桃のやうな顔色になり、健康を増進するこいふの
であらうか。

桃の酒子供のやうにかしこまる 壺中

子供の心にかへり、子供の日にもごつて楽しい盃にかし
こまる人の姿は想像して見るだけでもうれしい。(白酒は
桃花酒から變つたものこ聞いている)。

桃は少女の姿こ心こ持つ花のやうに思はれる。赤くふ
つくりこした所に花の生命があり、少女の生命があるので
あらう。

桃は又雛壇に最もふさはしい花である。

桃ありて益々白し雛の殿 太祇

桃の蕾の愛らしさは、雛祭の御馳走のおいりこ相俣つ
て、色も形も好ましいものである。(桃は葉も薬用として
貴ばれる。菱餅はこの桃の葉をかたぎつたものであるこい

ふ)。

桃の節句はそのまゝ美しい詩である。

